

愛ランド通信

～人と動物の共生を目指して～ 平成29年度夏号

犬＆猫の飼い方 注意情報

犬の飼い主のお散歩マナー

犬も飼い主も楽しいお散歩。でも、飼い主の認識不足や自己中心的な行動で、周りの人を不快にして犬のイメージを悪くしています。**基本のルールとマナー**を守って、快適なお散歩を心がけましょう。


お散歩のマナー 犬が苦手な人もいることを忘れないで！
犬が社会に認められ愛される存在になるように

リード（引き綱等）は外さない
犬が苦手な人にとって、つながれていない犬は恐怖です。人への飛びつきや咬傷事故・犬同士のケンカ・交通事故や迷子など、犬にとっても危険がいっぱいです。**あなたの犬を守るためにも、お散歩中はリードをつけましょう。**伸縮式のロングリードは周りに人がいない場所に限り、人通りの多い場所では短くリードを持つなど周りの状況に合わせて使い分けましょう。どうしてもリードなしで遊ばせたい場合は、ドッグランを利用しましょう。飼い主の転倒防止や事故防止のために、お散歩は犬を制御できる人が行ってください。

公共の場所を汚さない
あらかじめ自宅で排泄を済ませるのが基本ですが、お散歩中に排泄してしまった場合、ウンチは持ち帰り、オシッコは洗い流しましょう。また、公共の場所や他人の所有物にマーキングをさせないようにしましょう。時々、外でブラッシングをしている飼い主さんを見かけますが、犬アレルギーの方に配慮して、周囲に迷惑がかからない場所で行いましょう。

しつけ・感染症予防対策など
・引っ張り癖やほえ癖、拾い食い癖がある場合は、ドッグトレーナー等、専門家に相談しましょう。
・愛犬のためにも、お散歩で会う犬達のためにも、混合ワクチン接種、ノミ・マダニ対策、フィラリア予防をしましょう。
・発情期のメスはトラブルを避けるため、犬の少ない時間帯にお散歩しましょう。

基本のルールとは？
国の狂犬病予防法で義務付けられています
・年1回**狂犬病予防接種**を受け、**犬鑑札と注射済票**を着けましょう。
・犬が人に危害を加えたら、すぐにお住まいの**保健所**等に届け出てください。
※京都市は、条例で**ウンチの回収用具の携帯・ウンチ回収の義務**があります。



お散歩バッグ
中にオシッコを流すための水・ウンチ回収用ポリ袋などを入れています (Jun)



特集

災害時にペットと避難するために

▲センター収容猫（雑種、2～3ヶ月齢）

▲センター収容犬（雑種、オス、5～7歳、施設名：南斗）

夏は台風や大雨などに警戒が必要な季節です。近年では、大きな地震も頻発しており、避難命令が発令され、自宅から避難所に避難するといったことも、珍しいことではなくなってきました。

平成23年の東日本大震災や昨年4月の熊本地震では、災害時のペットの取扱いが課題となりました。このため、今回の特集では、ペットと避難するための備えについて、皆さんと一緒に考えていきたいと思います。

京都府、京都市の取組について

国の「災害時におけるペットの救護対策ガイドライン」（平成25年6月環境省発行）においては、災害時にはペットの飼い主がペットを連れて避難すること（同行避難）が基本とされています。しかし、実際には、避難所へのペットの受入れについては、市町村の判断に任されています。このため、京都市や京都府下の市町村でも、同行避難についての具体的な取組が進められてきました。

京都市

京都市では、地域住民が自ら避難所を開設、運営することとしていることから、避難所におけるペットの受入れを地域ごとに具体的に検討していただくため、「ペットの避難どうしよう？」という手引書を平成28年3月に発行するなど、ペットの防災について、取組を進めてきました。平成28年5月市会においては、門川市長が「市内424箇所

の避難所全てについて、手引書に掲げるペットの受入スペースの検討など、ペットの受入れに向けた具体的な取組をしっかりと支援していきたい」と表明したことを踏まえ、同年9月3日実施の京都市総合防災訓練においては、初めてペットを連れての避難訓練が実施され、多くの市民が参加するとともに、その成果を各地域に持ち帰り、取組が進められています。

京都府
京都府では、平成27年1月に改訂された「京都府動物愛護推進計画」にペットの災害対策を盛り込んでおり、平成28年9月4日、南丹市で実施された京都府総合防災訓練において、ペットの同行避難訓練を初めて実施しました。

平成28年10月の府議会においては、山田府知事から「今後、避難生活が長期化した場合に対応できるように、市町村や府獣医師会、動物愛護団体とも連携して、例えば預かっていただくボランティアを募集したり、マッチングできるようなシステムも検討していきたい」という趣旨の発言がありました。

今後の取組

国においても、熊本地震の教訓を踏まえ、今秋にも「災害時におけるペットの救護対策ガイドライン」の改訂を行う予定とされています。今後、行政だけではなく、地域で、また、ペットの飼い主が自ら避難先の確保や避難所での生活を想定した備えに取り組んでいくことが求められています。



▲センター収容犬（雑種、オス、7～8歳、施設名：ダクオ）

インタビュー

センターから譲渡されたワンコその後、どうしていますか？
家族に迎えて

安原さんが15年間共に過ごしてきたシェルティを亡くしてから1年程経った時、たまたまセンターのホームページで、前の犬に面影が似ているかたろうくんが目にとまりました。
センター職員からは「一生普通の犬のように散歩もできないかもしれない。それくらいの覚悟が必要」と説明されましたが、何度も何度も通いながら考え、家族に迎え入れる決心をしました。当初は、固まって動かず、触ろうとすると怖がって逃げ、トイレもあちこち、庭にも怖くて出られないといった様子。人慣れしていない犬の難しさを実感し、「本当にやっていけるだろうか？」と不安を感じたそうです。それでも焦らず、かたろうくんが心を開き近づいてくれるの

今年の目標は一緒にお散歩に行くことです！

安原美姫さんが昨年11月に譲り受けた『かたろう』くん（現在、推定2歳）はほとんど人慣れしていない放浪犬でした。



▲リラックスしたかたろうくん

をじっくりと待つ安原さんの気持ちが伝わったのでしょうか。今ではお腹を見せてなでなででもできるようになり、帰宅すると玄関前で尻尾を振ってお出迎え！まだ玄関の外には怖がって出られませんが、リードをつけて庭を歩けるようにもなってきました！「少しずつできることが増えてくるのは嬉しいですね」と安原さん。

最後に「愛情を注ぎ、一緒に暮らしていたら、心を開いてくれると思うので、こういう保護犬をもらってくれるお家が軒でも増えてくれたら嬉しいですね」と語ってくれました。(M.Y.) (写真提供：安原美姫子さん)

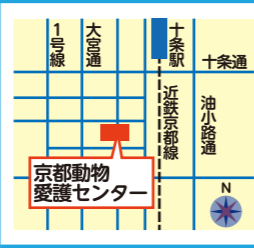


▲安原さんとかたろうくん

今回特集の記事を担当し、調べてみると知らなかったことがたくさんあり、色々と考えさせられました。いつか多くの場所で同行避難が受け入れられる日が来てほしいなと思います。(M.I.) 今回、機関紙作成にあたり、皆さんからペットのためになる話を聞けて、大変勉強になりました。また機関紙には、制作に携わっておられる方々のペットへの愛情がたくさん詰まっているんだなあと、感じました。(Mero)

本誌は「京都市人と動物が共生できるまちづくり基金」からも出資いただいています。まちづくり基金に寄附していただいた方のお名前はホームページにて公開いたします。なお、寄附の方法についても、こちらのホームページでご覧いただけます。

センターへのアクセス



- ・近鉄十条駅から徒歩5分
 - ・京都市営地下鉄丸線 十条駅から徒歩15分
 - ・京都市営バス 十条大宮停留所から徒歩5分
- ※無料駐車場はございません

〒601-8103
京都市南区上鳥羽仏現寺町11番地
電話：075-671-0336
FAX：075-671-0338
開所時間：午前9時～午後5時
休所日：木曜日（祝日の場合は翌金曜日）
年末年始



災害時にペットと避難するために

特集

家族同様のペットの避難も真剣に考えて！



① 地域住民から理解を得る

避難所の運営は、地域住民を中心とした組織によって行われます。ペットを飼っていない方など、地域の方の理解を得ることで、避難所でのペットの受入れがしやすくなるようにしましょう。例えば、犬の散歩時には、あらかじめ自宅において排泄を済ませ、よその家の前や道路などを汚さないようにしたり、ご近所の方にあいさつをするなど、家族の一員として地域に認めてもらうよう気を付けましょう。

② 避難所の確認をしておく

お住いの地域では、避難所でのペットの受入れが認められていますか？事前に確認をしておくことでいざという時に素早

く行動ができます。避難所でのペットの受入れに関する情報は、各自治体の防災の担当部署等でご確認ください。

③ 避難用品の確保

ペットのエサ、非伸縮性のリード、ケージ、ケージを覆うタオルやシート、飼い主と写っているペットの写真など、避難行動や避難生活に必要なものを準備しておきましょう。

フードと水は犬猫の場合でも5日は入手困難だと言われていすし、小型動物(うさぎ等)では1か月も入手できなかったこともあったようです。

④ 普段からしつけや世話をしっかり行う

災害時に家から逃げ出すこともあるため、首輪や犬鑑札・迷子札、マイクロチップの装着により、飼い主の標示をしておきましょう。

また、避難所への移動や避難所での生活で使われるキャリーケースやケージに慣らしておくことも必要です。

避難所では、動物が苦手な方もおられますし、他の動物とも一緒になります。臭いや体毛の飛散がないよう清潔を保つことや排泄のしつけを行うこと、無駄ぼえなどの問題行動を直して



▲キャリーケースは、すぐに持ち出せるように用意しておきましょう。

おくことが大切です。また、寄生虫駆除や避妊去勢も済ませておきましょう。

このように、ペットの防災対策につなげる意識を持って、普段からしつけや世話をしっかりと行ってください。



▲センター収容犬(雑種、メス、9歳、施設名：ゆきこ)



『ペットを連れて避難生活ってどんなもの？』

ペットを連れて避難生活では、どのようなことが起こるのでしょうか？ペット連れの避難生活が始まった当初は、避難所の方々もペットを可愛く思ってくれます。しかし、避難生活が長期化することに伴い、人々の間に不安やストレスが広まり、ペットの鳴き声や臭い、体毛の飛散などのトラブルが生じ、飼い主が出て行かざるを得ないケースが起こりかねません。避難所では、原則、人間の居住スペース外にペット居住区(ケージ保管場所)を設置することになります。

なお、自家用車での車内泊は周囲に気を使わなくてすみませんが、『エコノミークラス症候群』の危険性を伴いますので、お勧めはできません。避難所での受入れが不可能な場合は、ペットの預かり先を決めておくなどの対策も考えておく必要があります。

また、猫は驚いて屋外に逃げたり、物陰に隠れて捕獲できないなど、同行避難が難しい場合があるようです。地震で自宅が倒壊しなかった方の中には、家中のいたる所にエサや水を設置して避難された方もおられました。



最後に

災害は突如襲ってきます。誰もがパニックになり戸惑ってしまいます。また、ペットを連れて避難生活は手探り状態であるため、避難所内が混乱することもあります。中には、避難所で自分の意見ばかりを通そうとする飼い主さんもいるそうです。

被災地では、みんなが被災者。避難所の運営者も被災者です。それを忘れずに、周囲の人たちと協調していくことが大切です。



す。慌てずに冷静に避難できるように、普段からの心づもりと準備をしましょう。(文：M.I. & Mero)

▲ペットと同行避難した避難所で、人の居住スペース外に設置されたペットの居住区の様子(熊本地震における実際の避難所での一例)。軒下に設置され、雨天時はブルーシートを被せる。(写真提供：災害時ペット捜索・救助チームうーにゃん 代表うささん)

『京都動物愛護フェスティバル』へ行こう！

センターでこんなことやってます！

今年は9月23日(土)に開催します！

【現地レポート】

行ってきました！平成28年度『京都動物愛護フェスティバル』

昨年9月25日、岡崎公園(京都市左京区)で京都動物愛護フェスティバルが開催されました。

ステージでは、KBS京都ラジオの生中継や様々なプログラムが行われ、京都動物愛護センター(以下、「センター」)の名誉センター長である杉本彩さんの姿もっ！

ステージの周りには、センターのドッグランのネーミングライツパートナーである日本ヒルズ・コルゲート株式会社をはじめ各種団体のブースが置かれ、杉本さん主宰の団体のブースと並んでセンターのブース、また、センター内で活動している我々ボランティアのブースがありました。

赤いベストが印象的なボランティアたちがイベント会場を練り歩き、センターに関するクイズで活動をアピール。ブース内も活気であふれていて、活動に興味がありそうな方がブース内のパネルに真剣に見入っておられました。かくいう筆者もその一人。



▲動物愛護センターのブース(左)とボランティアのブース(右)



▲ステージ上で活動内容の紹介をするボランティアスタッフ

▲ボランティアブースの様子

「ボランティア活動したい！」と思っても行動を起こさなかったり、情報や機会がなかったり。第4期ボランティアの募集を知ったとき、悩みましたが、後悔をしたくない想いから応募。そして今では第4期ボランティアとして先輩ボランティアとともに活動しています。

そして今年も動物愛護週間(9月20日~26日)中の9月23日(土)に動物愛護フェスティバルが開催されます。一人でも多くの方にセンターやボランティアの活動を知っていただくと嬉しいです。

ぜひ、会場に遊びに来てください。ボランティアスタッフ一同、お待ちしております！！(T.O.)



▲年賀状のモデルになったクウ(左)とムク(右)。

この子たちがいいと思った瞬間

ボランティア1期生 伊東マユミ&クウ

前世は猫だったに違いないと思うほど、生まれてこのかた猫とは縁が切れません。どの子もワケがありますが、私が猫を選ぶというより、猫の方が私を選んでくれたような気がしています。ボランティアに参加したのも、そんな猫たちに報いたいという思いからでした。

今は「クウ」という14歳のメス猫と暮らしていますが、半年前までは、同い年のオスの黒猫「ムク」もいました。2匹との出会いは3年前のこと。前の子、黒猫の「タンゴ」が亡くなって半年が過ぎ、次の子はセンターからと考えていましたが、その時は譲渡対象の猫がいませんでした。民間のボランティアさ

んに問い合わせると、もっと大変なところがあると紹介されたのが京都のお寺。30匹以上の猫を保護していたご住職が死去され親戚のAさんが新たな飼い主を探しているとのこと。このことは新聞に載り、私はその記事を読んで知っていたのです。巡り合せとは思えないものですね。お寺へはダンナと行きましたが、不安な面もありました。平均年齢9歳のうえ、ほとんどの子が人に馴れていないと聞いていたからです。「2匹とも11歳、黒ちゃんです。きょうだいではありませんが、大の仲良しです」とAさん。通された部屋に入ったとたん、ムクがとんできて、「なでて！」「遊んで！」とグイグイくるではありませんか。警戒心が強く棚の上にいるクウまでダダっつと降りてきて、ダンナの手をペロペロ攻撃。2匹の作戦にまんまとはまった私たち。一緒に過ごす時間は短いけど、それでもこの子たちがいいと思った瞬間でした。

ムクは腎不全になりこの世を去りましたが、ムクがいた時は何かにつけ遠慮さみだったクウも、甘えてくるようになりました。年を重ねた猫の良さは、その場の空気を読んで人の気持ちに寄り添ってくれる優しさでしょうか。この子との暮らしが一日でも長く続くことを祈るばかりです。



クウ「毛並つやつや、まだまだいける？」▲